

## 令和3年度入学試験問題(前期)

# 国語

### 【注意事項】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いて見てはならない。
2. 本冊子には、一から三までの3問題が印刷されていて、合計14ページある。  
落丁、乱丁、印刷の不鮮明な箇所等がある場合には、申し出ること。
3. 解答用紙を別に配付している。解答は、解答用紙の指定された箇所に記入すること。所定の箇所以外に記入したものは無効である。
4. 解答の字数を指定している場合、句読点や符号やかっこ等もそれぞれ一文字分に数える。
5. 解答用紙の指定された欄に、学部名および受験番号を記入すること。
6. 配付された解答用紙は、持ち帰らないこと。
7. 配付された問題冊子は、持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権の関係上、省略します。

著作権の関係上、省略します。

著作権の関係上、省略します。

著作権の関係上、省略します。

著作権の関係上、省略します。

(樫木野衣<sup>さむらぎのい</sup>「爆発」、丸石神、グランソリギニヨルな未来『芸術人類学講義』所収より)

問一 傍線あゝおの漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

あ 遡行      い 蒙昧      う 喝破      え 過(ち)      お 拮抗

問二 傍線カゝコのカタカナを漢字に直しなさい。

カ ヨクアツ      キ モウイ      ク カツキテキ      ケ リンカク      コ カクリ

問三 空欄 a } d に入る最も適当な語句を次より選び、それぞれ記号で答えなさい（それぞれの記号は一度しか使わない）。

ア さらに      イ しかし      ウ では      エ たとえば      オ つまり

問四 傍線1「埋めるのがむずかしいギャップ」とあるが、これについて説明したものとして最も適当な選択肢を一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類は自然と向き合わねばならない過酷な状況に置かれていたため、人間的な要素を見出し文芸という概念へと高められないということ。

イ 芸術史がルネサンスに成立したため、それ以前の自然に翻弄されていた人類による表現の歴史を対象とすることに困難が生じているということ。

ウ 人類学が対象とする時代と芸術が対象とする時代との間には「暗黒の中世」が存在したため、両者が扱う世界観が全く異なるものになっていること。

エ 芸術が人間という概念を前提とした上で芸術を人間に固有のものとするため、その概念が適用できない時代を対象に思考できないということ。

オ 人類の歴史は時間の流れに沿って進むため、特定の時代から意図的に過去へと向かう芸術の歴史認識の方法とは矛盾が生じているということ。

問五 傍線2「ルネサンス」とあるが、筆者による「ルネサンス」の説明としてふさわしくない選択肢を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人ならざるものも人に似せて表現し、美術史の規範となった。
- イ 宗教による支配に異議を唱え、人に関する新たな表現を模索した。
- ウ 「人間」という概念を生み出し、科学や芸術の枠組みを作った。
- エ 現在、私たちが美術史と呼べるような追究が可能になった。
- オ 科学や芸術の担い手としての人の価値を高めることに成功した。

問六 傍線3「ものしなかった」とあるが、この言い換えとして最も適当な選択肢を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 重視しなかった
- イ 作り出さなかった
- ウ 理解しなかった
- エ 身につけなかった
- オ 味わえなかった

問七 傍線4「新たな『人間』と言えども『人類』であることを根本から克服したわけではまったくくない」とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。四十字以内で説明しなさい。



問八 傍線5「縄文土器や洞窟壁画」とあるが、これらを筆者はどのようなものと理解しているか。最も適当な選択肢を一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 大災害や疫病などから人びとを守るという迷信に基づく、儀礼のために作られたもの。
- イ 民族学や文化人類学的な知見がなければ、芸術として見直すことができないもの。
- ウ 個人が特定の集団を自然がもたらす災いから守るために、願いを込めて作られたもの。
- エ 近代以降に自明のものとなっていて、枠組みでは評価できないが、何かを表現したもの。
- オ 古代において特定の集団の中で必要とされて作られ、人類の視点から評価されるもの。

問九 空欄  には本文中の二字の語が入る。それを空欄  より前の本文から抜き出しなさい。

問十 傍線6「人間は人類にとつての上位概念ではない」とあるが、本文では両者の差異と共通点をどのように捉えているか。五十字以内で説明しなさい。

問十一 傍線7「芸術人類学」を本文ではどのようなものとしているか。九十字以内で説明しなさい。

二 二 次 の 文 章 は、 語 り 手 が あ る 女 性 に 物 語 を 聞 か せ て い る 場 面 で あ る。 読 ん で 後 の 問 い に 答 え な さ い。

著 作 権 の 関 係 上、 省 略 し ま す。

著作権の関係上、省略します。

(『磯崎』より)

(注) ○阿波国 — 現在の徳島県。 ○衣鉢 — 三衣一鉢の略。受戒するときには師僧から与えられる。転じて教法、奥義。

○一七日 — 七日間。 ○二十七日 — 十四日間。

○無念無想 — 無我の境地に入り一切の想念を離れること。無心。 ○三十七日 — 二十一日間。

○一念発起 — 心に帰依する一念を起こし、悟りを求める心を起こすこと。

○菩提 — 煩惱を断つて得られる仏の悟りの境地。それを求める心が菩提心。

○俱胝劫 — はかりしれないほど長い時間。

問一 傍線1「ならせ給ひける」、傍線2「宣へば」、傍線3「習ひ参らせたまき」、傍線4「座し給へ」は、それぞれ誰が誰を敬っているのか。次のア～エの中からそれぞれ記号で答えなさい。

ア 語り手      イ 壬生忠義の女房      ウ 僧侶      エ 聞き手

問二 A **候**ふ、B **給**ふ、C **け**り、D **け**りの前後を読み、文法的に適切な形に活用させなさい。

問三 二重傍線A「憎き者失ふ秘事」とは具体的にどのようなことであったか。十五字以内で答えなさい。

問四 二重傍線イ「失はば」の下には、文が省略されている。その部分を本文から十三字で抜き出しなさい。

問五 傍線5「桜木」、傍線6「花」は何を表しているか。それぞれ三字で答えなさい。

問六 傍線7「よつて」について、(1)音便の種類を答えなさい。(2)音便を用いない形に直しなさい。

問七 本文の語り手は、聞き手の女性に何を訴えていると考えられるか。女性の現在の心情が分かるように、三十五字以内で答えなさい。

問八 南北朝から江戸時代初期にかけて、女性や子どもの読み物として、平易な散文の読み物が数多く作られた。このような読み物には、『ものぐさ太郎』『酒呑童子』『一寸法師』などが含まれる。このような読み物を一般に何と呼ぶか。四字で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい(設問の都合で返り点・送り仮名を省略したところがある)。

著作権の関係上、省略します。

(沈括『夢溪筆談』より)

- (注)
- 王聖美 — 本名は王子韶、聖美は字。あきよし北宋時代の役人。
  - 県令 — 中国における県の長官。 ○達官 — 重い官職、高い官位にある役人。
  - 生平 — 平生に同じ。ひごろ、ふだん。 ○暁 — わかる、理解して明らかになる。
  - 奥義 — 学問・技芸・武芸などで最も奥深い大切な事柄。ここでは深い意味。
  - 孟子不見諸侯 — この句は『孟子』「滕文公下」に二箇所、「万章下」に一箇所みえる。

問一 二重傍線 a・b・c について、送り仮名も含めて、読み方をひらがなで書きなさい。

問二 傍線1「達官」について、本文から読み取れる「達官」の態度を表した四字熟語として最も適当なものを、次の中から一つ選び、漢字に直して答えなさい。

リンキオウヘン                      タイゼンジジャク                      ボウジャクブジン                      トウイソクミヨウ

問三 文脈から考えて、空欄 **A**・**B**・**C** に入る最も適当な語を、それぞれ一つずつ選び記号で答えなさい。

- |          |           |           |          |             |
|----------|-----------|-----------|----------|-------------|
| <b>A</b> | ア 讚(たたふ)  | イ 肯(がえんず) | ウ 晒(わらふ) | エ 懼(おそる)    |
| <b>B</b> | ア 愛(あいす)  | イ 疎(うとんず) | ウ 悪(にくむ) | エ 諾(うけがふ)   |
| <b>C</b> | ア 説(よろこぶ) | イ 訝(いぶかる) | ウ 譏(そしる) | エ 慮(おもんばかる) |

問四 傍線2「如何従頭不曉」について、すべてひらがなで書き下し、現代語訳しなさい。

問五 傍線3「其人愕然無対」について、王聖美が主人である達官を「愕然」とさせた理由を三十字以内で説明しなさい。

問六 本文中に登場する「孟子」の思想を示した文章として最も適当なものを、次の中から一つ選び記号で答えなさい。

ア 水<sup>ハ</sup>善<sup>ク</sup>利<sup>シ</sup>万<sup>ヲ</sup>物<sup>ニ</sup>而<sup>モ</sup>不<sup>レ</sup>争<sup>ハ</sup>。処<sup>ニ</sup>衆<sup>ニ</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>惡<sup>ム</sup>。故<sup>ニ</sup>幾<sup>ニ</sup>於<sup>シ</sup>道<sup>ニ</sup>。

イ 人<sup>ノ</sup>性<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>善<sup>ナ</sup>也<sup>ハ</sup>、猶<sup>ホ</sup>水<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>就<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>也<sup>ハ</sup>。人<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>善<sup>ナ</sup>、水<sup>ノ</sup>無<sup>ク</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>下<sup>ナ</sup>。

ウ 人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>性<sup>ノ</sup>惡<sup>ナ</sup>。其<sup>ノ</sup>善<sup>ナル</sup>者<sup>ハ</sup>偽<sup>也</sup>。今<sup>、</sup>人<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>性<sup>ノ</sup>生<sup>マレ</sup>ナガラニシテ、而<sup>リ</sup>有<sup>ル</sup>好<sup>ム</sup>利<sup>ヲ</sup>焉。

エ 若<sup>シ</sup>使<sup>メ</sup>天<sup>ヲ</sup>下<sup>ヲ</sup>兼<sup>テ</sup>相<sup>シ</sup>愛<sup>ス</sup>、愛<sup>ス</sup>レ<sup>バ</sup>人<sup>ノ</sup>若<sup>ク</sup>愛<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>身<sup>ヲ</sup>、猶<sup>ホ</sup>有<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>孝<sup>者</sup>乎。